

翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十二)

肥田 嘉子
隅田 三鈴

凡例

一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(十一)」（『京都光華女子大学 研究紀要』第四十九号、平成二十三年十二月）の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「六編下」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。

一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

1、図版は各丁見開きを二面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。

2、本文翻刻は、やはり「一ウー二オ」のように冠し、改行位置は／で示し、丁移りは「」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。

3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。

4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。

5、読みやすくするため、句読点を補い（ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった）、会話文については「」を、会話中の会話文には「」を補った。原文にある「」は『に改めた（原文の「あるいは『は、』とした。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。

6、原文の振り仮名は、右と区別するために（）に入れた。ただし、袋・表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に（）をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。

7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。

8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。

9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○（段落を改める意識で使用されている模様）は、その位置にそのまま翻刻した。

一、末尾に、前号までに做って、「六編下」に出るもののみながら、登場人物名（まれに地名もある）と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との対照表を付した。

〔原表紙〕
雪梅／芳譚 犬の草紙
一名八犬傳
六編下
歌川貞秀画
蔦／吉／版
〔振り仮名は原文のまま〕

〔原表紙見返し〕
犬の草紙六編下／冊
一寸此処にて／御ひろう申上候
御くすりおしろい／白芙蓉一包／三十六銅
同うずけしやう／曙の富士 同／同
ぱつちり／ゑりおしろい 一袋／四十八銅
賣弘所 中はし／つたや吉藏
粉／紅英堂精製
〔振り仮名は原文のまま〕

笠亭仙果／鈔録 歌川／貞秀画
中／橋／紅／英／堂／刊／行



図版1 六編上原裏表紙（色刷）、六編下原表紙（色刷）

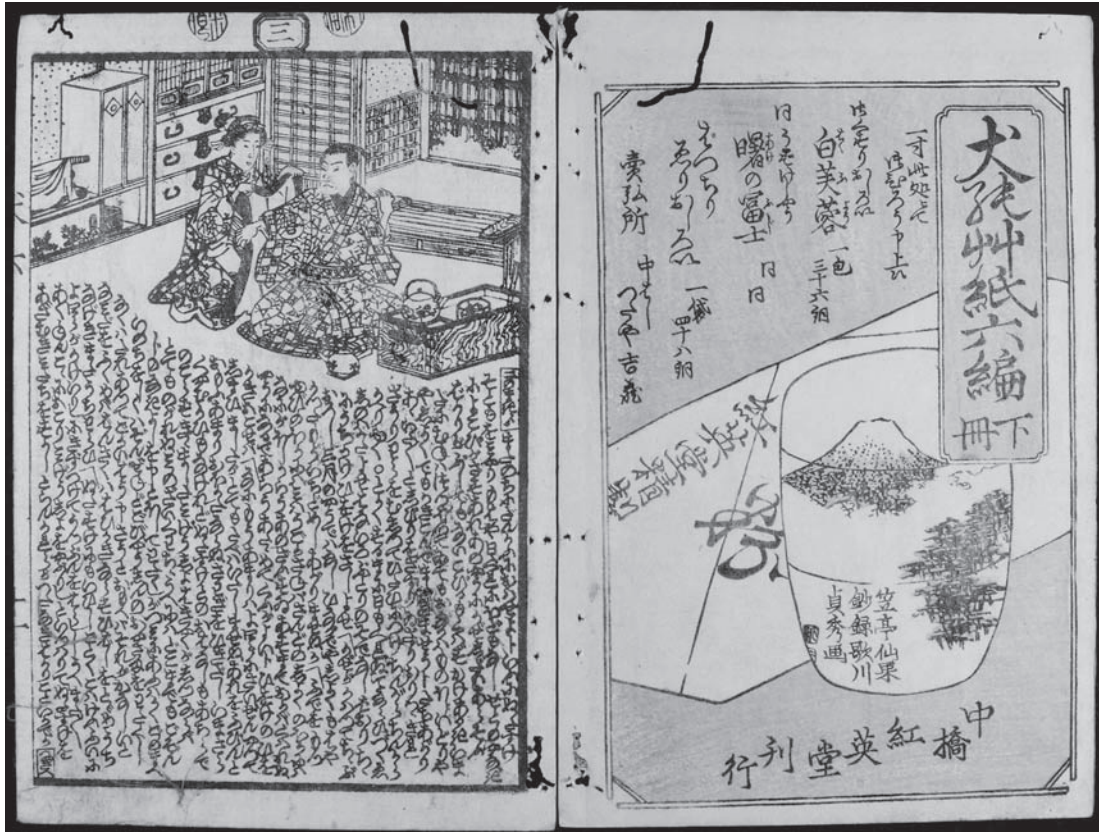
〔十一才〕

三

二の巻より また後に談合におはせよ」ト言ふに、沼田助／外面を見遣り、「最早日暮れに程もなし。背戸の柳／に横陽が差す。あれあのやうに風次第、争ふ／ばかりが武士でもない。小昼も食はず駆け歩き、未／だに胸は突つ張つてゐてもお腹は物欲しい。どりや／夜食でも掻き込んで、また来ませう」ト立ち上がり、／「あ、痛く」と痺りを擦り、膝行り下りつ、切／草履藁を巻つて額につけ、ちんがらちんから／帰りに行く。○兎角する間に日も暮れぬ。手習ひ机／篠兎は片寄せ、花色太織の袖無羽織、父／に打ち掛け、火桶をさし寄せ、『風が変はつて秩父／嵐、三月のやうではなし。日長で夜食も早／かつた。もう一度召し上がりませぬか』筆を持つ／指の他には身は動かさねば、三度の食の他には／何が欲しからう。あの雑炊明日まで置かば食はれぬ／やうになるであらう。暖めて食ふが良い」ト火桶の火を／掻き熾せば、『なに、もう余りはよ四郎に最前やつて／了ひました、とても食へば致しませぬ。あれを不便と／思ふ余り、大方ならぬ騒ぎを引き出し、今更／悔やむ甲斐もなければ、沼田助とのお話も彼方で／残らず聞、ました。御教書破却が美ならば、／とても逃れぬ身の罪科。父上には何処までも御存／知のなき由を申通して、私／が罪にあふは覚悟の前。命惜しくは存せねど、御病身の親様を私／なくは誰あつて御介抱申さうと、思へばそれが悲しい』と／涙を含めば、響作は灰掻き均す火箸を止め打ち／嘆き、また打ち笑ひ『沼田助にも言ひし如く、此は今日不意に／よ四郎が駆け入りしに傷つけて鬱憤を晴らしし上、また／悪念此処に起こり、御教書を破りしと偽りて沼田助を／欺き、御太刀を賺し奪らん彼等が拙き謀。如何でか／つぎへ』

〔十一才—十二才〕

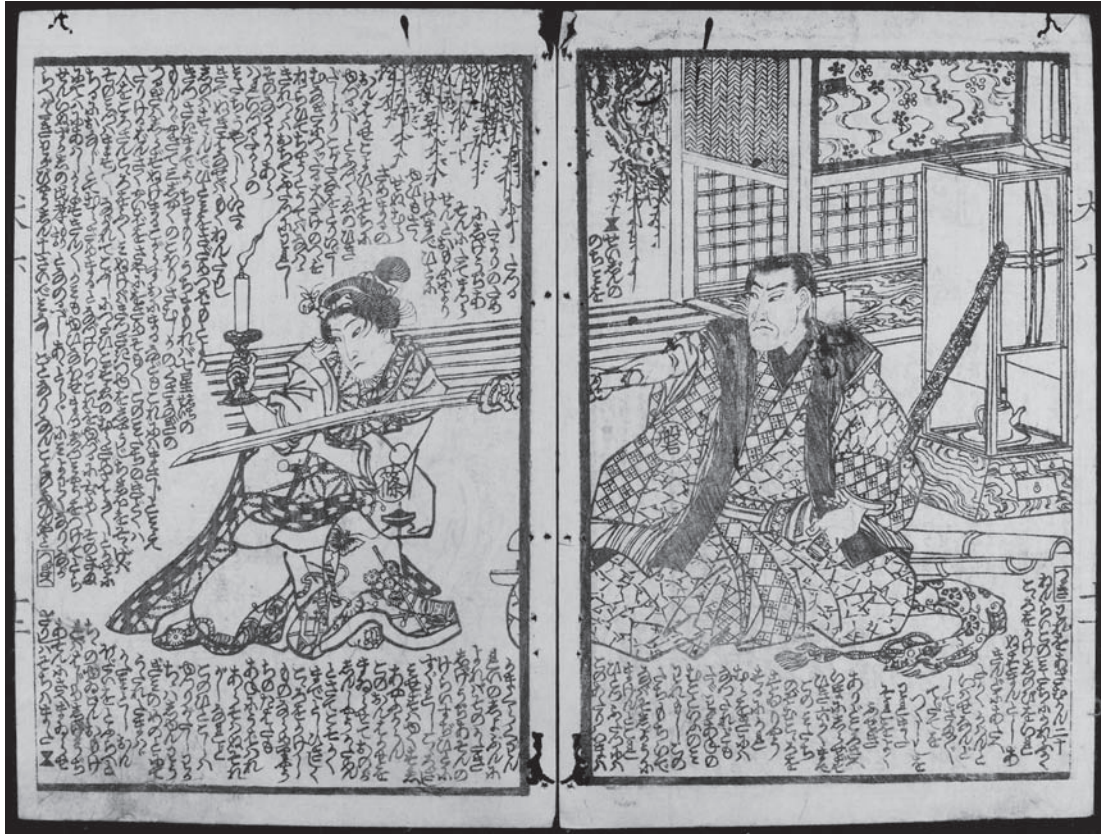
つゞき 我を欺かん。二十／年来この御太刀に彼深く／心をかけ、忍びを
入れ／盗まんとし、あ／きんどに値／高く買はんと／言はせなんど／して、



図版2 原表紙見返し(色刷)、十一オ

様ぐ／手立てを／尽くししを、／我また／それをよく／防ぎ、／在り所
 さへ／今に知らせず。／非義六斯くまで／この御太刀／望む心を／推量
 するに、彼／村長には／なつたれども／たゞ我が姉の／婿といふのみ。／我
 もしこの／太刀持ち出で／なば、訴訟に／負けんと、これ／一つ。二つに
 は／この辺り今は「鎌倉管／領の処分に／よれば、その仇／成氏朝臣の
 家来筋。人に／優れし志」／見せずは行末／危ふからん。／この御佩刀を
 参らせて己が／身上堅めん／と、さてこそ斯く／まで年久しく／心をか
 けしものならぬ。領／地の田畑も／姉に奪はれ／争はぬそれ／がしなれ
 ど、／この一腰は／譲り難し。我か／父は春王／君の傳にて、／討たれ
 給は、／形見とし、御／菩提を弔へ／と／父の遺言重け／れば、初め成氏
 朝臣にさへ参らせ／ざりしは、其方はまた●●成人の／後身を」立つる
 頼りの為／に成氏あ／そこに奉ら／せんと思ふにより／今日まで人に
 指も指、／せぬむら／さめ丸の／御佩刀。今宵は其方に／譲るべし」と文
 机の抽／出より小刀を取り出だし、／棟木に吊つたる大竹の筒を／狙ひて
 ちやうと打てば、繩／切れ、筒は落ちて二つに割れし／その中より、あら
 はれ出づる宝の／御太刀。恭しく頂／きて抜き放せば、黙然たりし
 篠兎は進んで瞳を定め、鏑元より／切つ先まで打ち守り打ち守れば、七星
 せいの／紋輝きて三尺の水寒し。かの草薙の／剣は知らず、抜丸、小
 烏、鬼丸などもこれには勝じと見えたりける。磐作刃を鞘に収め、「そも
 くこの御太刀の奇特は／人を殺さん心を含み、抜けば切つ先露を生じ、
 血潮を注げば／その水はます／流れて拳に伝ひ、梢の村雨はらくと風
 に／散るに同じとて、村雨丸と名付けらる。これを譲るに女めくその様／に
 ては似合はしからず。近く／髪も結び直せ。まづ実名をつけてとら／せん。
 犬須賀篠兎戌孝と名乗るべし。嗚呼年／に身弱くなり、なが／らへ難き
 我が病身。十一歳で孤児となりなんことの不便や」と

〔十一オ一十三ウ〕
 つぎ打ち嘆く顔差し覗き、『お弱くても／五十にもおなりなさらぬ父上の、
 存へ難し／なんど、は、もう仰つて下さりますな。心／細うなります。
 やつばかりの御教書のことので／討つ手が向かふなら、私を助けうため捕ら



図版3 十一ウ、十二オ

はれて／行く御心か」ト言へばからく打ち笑ひ、「あれは跡形／なき偽り。捕らへらるゝ道理はなし。たゞ今日姉が／親切顔、実情ならねど其方がこと懇ろに／言ひしに頼り、存へ難き某が、腹搔つ捌いて其方の世話姉に任せてさせん所存。決着／せし」と言ふに驚き、「死なでもよき命を捨て、敵に／その子を任すとは貴方は氣でも違ひしか」「を、その疑ひ無理ならず。これ我がかん／が得たるどころ。斯くてぞ御太刀も奪はれず、その身も易く成長／せん。姉夫婦は欲に耽り恩も義理も知らねども、今我腹を切つて死なば、非義六は「村の者がいよく己を憎みて許／さず、我が身の非道を訴へ出づることもや／あらん」と危ぶみ恐れん。さる時は／村人の腹立ちを休めんため、其方を家に養ひとり、実意を／示して育つべし。その時御太刀は／何と言ふとも、姉夫婦の手に渡すな。成長せば許我殿へ参りて／殿へ奉れ。彼我が物には／ならずとも、「二つ家に住むときは／奪ひ取るにも容易し」と思ひて、奪ふ心さへ弛まるべしと／思ふかし。盗む心の」弛まずば、防ぐにもまた／手立てを巡らし、機に臨／み変に應ずる、仕方は／其方が知恵にあり。／もし漸くに志／あら／だめて実意を／尽くさば、其方／も実を尽くして仕へよ。／悪心／迫つて防ぎ／難くは、御太刀を／携へ早く立ち／退け。彼処に五年、また／七年、養はれしとて、非義六が／役目も領地も祖父の賜物。伯母婿の／恩にはあらず。これらのことも心／得よ。我／怒ひに命を惜しみ、この期を延ばし病／重り死なば、伯母も養ひくれじ。御太刀人手に／渡りなば、さは何程の遺恨なるべき。いで／君父の／形見の御太刀、最期にこれを借り参らせ奇特を見せん」と／件の一腰執り上ぐる、腕に纏り『末の末まで御思案／なされ、斯くまでも私を思つて下さるお慈悲をば弁へぬには／あらねども、治らぬ上にも療治して御看病／せし上に御取り／直しもないならば、また諦めてをりませう。見定めたることも／なきに、御自害あらば狂／乱と誰も／申すべし。今宵に限りも／せぬものを」と言はせもあへず、『虚け者、侍の子のやうにもない。それ／ほど別れが悲しいか。嘉吉の昔死すべきを存へしも、／父への孝行、君へ忠義の為ばかり。足萎えとなり千曲に三年、●●此処に住むこと二十年余、為す事もなく露の命貪るばかりで益なき身の／上。今又末を思ひ図らで何時までか／



図版4 十二ウ、十三オ

世にあるべき。止むるは不孝、其処退け」と叱つて左手を取り伸ばし、振返／＼されてもしがみつき、「お叱り受けても、お心に逆らうても止めます」ト御た／＼ちを執らんと争ふ篠兎。「い、や、離せ」「いや、離さぬ」「え、面倒／＼な」と磐作は篠兎を押し伏せ乗つか、る。撥ね返さんと焦れども、弱り切つても強気の磐作。力はあれ／＼ども子供の甲斐なき。「あれよ／＼」と叫ぶのみ。磐作は襟掻き開け、刃を抜き出で、右の袂、巻き添へへ腹へぐさ／＼と突ツ立て、心／＼静かに引き回し、喉を劈き、俯しに倒る、磐作、／＼起き返る／＼篠兎は死骸に抱き、付き、声を／＼限りに泣き叫び、／＼暫し正／＼体なかりけり。沼田助はこ、／＼ろもなく入り、来てつて差し／＼覗き、篠兎も身内は血／＼潮に染まり、共に倒れて泣く有様、驚き恐れ／＼て齒の根も合はず、震ひ／＼出しては止まらぬ膝、／＼足は踏めども、地に着かず、／＼入りもえせず、出でもえせず、声もえ立てず、尻居に倒れ、膝行り／＼／＼門へ出で、漸／＼／＼心に心を落ち、付け、「村長／＼にこの由を、まづ告げばや」と急ぎ行きぬ。

〔十三ウー十四オ〕

○篠兎は心を取り直し、「何程泣き／＼てももう帰らぬ。御遺言は腸に染み／＼通りに背くべき道理にあらねど、悪者、／＼伯母婿に養はれ、その上御太刀も奪られなば、／＼猶父上に言ひ訊なし。親子一緒に死ぬ／＼ことも戦の場にては常のこと。お言葉背くは、不孝なれど、お足の弱き父の手を引いて三途や死出の山、お供するより他はない。父／＼おはせぬに誰が為に生きて浮き世に辛抱せん。さうぢや／＼」ト彼の御太刀執り上ぐれば、あら／＼不思議や血潮流れて刃を染めず、切つ先／＼より露滴り止まず、斯程の奇特ある御太刀、勿体なけれど我もまた／＼借り参らせんと押し頂く。折しも庭に打ち伏したる犬は苦痛に堪へ／＼ざるか、聞くも悲しき長吠えに、篠兎はきつと見返りて、『よ四郎はまだ／＼死なぬか。何時までも苦痛をさせ、我も死なば遂にまた敵の手にこそか、る／＼べけれ。畜生の為用あんは殊に、恐れ多けれど、斯く奇特ある／＼刃にか、り死なば後生の為／＼にもならん。いざや苦痛を助けん』と、縁より降りて立ち向かへは、刃に恐れず前足を突き立て、首を伸ばし、／＼斬れと言はねど覚悟の態。振り上げし／＼拳も



図版5 十三ウ、十四オ

弱り『我には年も一つ兄、親に餓はれ我に懐き一度も打ち懲らし痛めさせぬこのよ四郎。打ち叩きて悪者に傷つけさせて遂にまた我が手にかくる不便』さよ」ト斬りかねたりしが、心を励まし、『如是畜生発菩提心』と念じて、はたと首打ち落とせば、血潮ざつと迸り、中に怪しき物こそ見ゆれ。左手を伸ばして受け止めつ、生血押し拭ふて見てあれば、豆を二つ寄せたる如き大きな玉にして紐通しの穴あり。甚く怪しみ真昼の如き月の光に透かし見れば、玉には孝かといふ文字据われり。思ひ出でたることこそあれ。その昔、我が母御前滝の川へ日参の帰りに、妖しき姫神の現れ給ひて白き玉授け給ひしことのあり。それ過ちて受け損じ、片方にありし犬の辺りにまろろばして、尋ねても遂に玉は無かりし由。その時、犬も拾ひ取り、その頃より懐妊して我を●●生ませ給ひしと何時ぞや御物語り。母上の御病、身も玉の失せたる故かとして、年頃心にかけたりしが、その始めこの犬が玉は飲みてありしなり。その奇特にて、齒並みも強く、毛も若やぎてゐたりしならん。孝の文字の我が名乗りに自然と合ふも不思議なれば、さこそ故由ありもせめど、今死ぬる身に益もなしと投げ遣れば飛び返り、また投げ遣れば飛び返り、懐へ飛び入ること三度に及べば、呆れながら「世の乱れ人の死ぬる時には怪しきことありと聞き、しは斯様のことなるか。とても生くべき心はなし。太刀も玉も亡き後にて取る人あらば取れよ」とて元の所へ立ち返り、座を占めて押し肌脱ぎ、ふと見れば我が左の腕に牡丹のかたちを成して黒き痣あらはれたり。「投げし玉の飛び返り懐へ入りし時この所に当たりしが、痣になるほど痛みもせず。斯る怪しみ見ることも今宵死ぬべき報せならん。父上母上諸君に一つ蓮に次へ

〔十四ウー十五オ〕

つぎ生まれしめ給へ」と唱へ、御太刀を引き抜き「南無阿弥陀仏」と唱ふれば、はや寺ぐの初夜の鐘、諸行無常と響きけり。○「早まるとまい。まア待つた」と庭口より呼びかけて、非義六夫婦、沼田助



図版7 十五ウ、十六オ

〔十五ウ—十六オ〕

つゞき 斯う／打ち砕けた／上からは、奥／菌に物を／挟むは悪し。氣を回さずと我／／打ち任せておくがよい』それほどまでに仰るに／何の死んでのけませう。承知しました。この上は、頼りない私を御不便加へて下さり／ませ」ト刃を鞘に収めつ、頭を／下ぐれば、非義六、瓶ぎ、ほた／と喜びてまづ磐作の死骸を／片付け、下男を呼び寄せて／家の内の掃除をさせ、その夜は／瓶ぎ、沼田助は死人の枕に／通夜をして憂ひに沈む篠兎を／慰め、次の日葬式を／営む程に、野送りする／村の者三百人に余りけり。／「斯くまで人に思はれたる磐作が／腹切りし元の起りは、跡形／なき偽りなれば、この上篠兎さへ／捨て置かば、村内の人怒り／腹立ち必ず事の破れと／ならん」と沼田助が事の由／告ぐると、そのま、相談取り決め、／駆け来つて忠実やかげに篠兎に聞か／せて、自殺さへ止めて実義をあらはしたる、／皆磐作が明察に洩れぬを深く／感じ入り、篠兎はいよ／父の別れ、／悲しみ嘆かぬ時もなし。』

四

またの日、非義六は「幼き篠兎を／一人も置かれじ。我が家に引き取り／養はん」と迎へ／の人を遣りけるが、／「四十九日のその間は元の家に／住みまし」とて否むも道／理と強ひもせず、万の／ことは沼田助に頼みはせしが、煮炊きの業小使ひ／にも、また連れにもなれば、／子供同士こそ良からめと／岳藏を遣はしおきつ。／此は我が心底／探らんための／回し者かと／疑ひて、しか／とは物さへ／言はず疎／しく／のみもて成しけるが、／岳藏も幼／けれど淑やかに／大人しく、並／／の子供にあらず。いと／忠実／しく仕ふるに、／自づから可愛くなりて／疑ふ心も薄らぎつ、／暮らすともなく三七日も夢の間に経ち、／春過ぎて不如帰鳴く頃になりけり。／或る日岳藏言ひけるは、『御髪も壊れ／お湯も召さねば、さぞ氣味悪くてなりますまい。／御中陰とは申しても御行水はなされても●●もうよいではござり／ませぬか。お湯も沸かして／おきました』それは／御大儀。言ひやる通り●●今日／南風で／生暑く、／久しう湯を／使



図版8 十六ウ、十七オ

はぬので／むさ／として／心地が悪い。／大盥を／出してたも」ト
 篠兎は立ち出で／帯なんと／解く間に湯を／取り庭に／置き、入れば／岳藏
 後ろに／回り垢を／搔、んと肩に／手を掛け、／「若／旦那の／お腕
 にも／牡丹の／様な／痣がある。／私も／同じ／やうな」痣が／肩に
 御座り／ます。／御覧／じ／ませ」ト／片／肌／脱ぎ／見／すれ／ば、
 ちり／けの／辺／より／右／なる／胛の／下へ／かけて／形さへ／色さ
 へ／変はらぬ／痣の／あり。／つぎへ

〔十六ウー十七オ〕

つぎ 私のは／生まれ。／貴方／のも然様／か」と●●問へとも
 篠兎は笑／ひて答へず。／『あの梅の／木の根元／に高く／土を／もちし
 は●●何故』と／問ふに答へて／「あれこそは／其方も知つ／てゐや
 るであらう。よ四郎犬／を埋めたところ」と言へば岳／藏顔赤らめ、
 『噛み殺されても／たか／猫。執心／深く／畜生を／相手にして、／大勢が、
 りで傷を／負はせて／腹癒せ／する、主／人に連／れるは下の／習ひ、
 私も／竹槍持／つて手柄／顔をしたであらうと／思し召しも恥づかしい』ト、
 心／ありげに言ふほど猶／篠兎は笑ひて何とも言はず。／縁へ上がりて身
 内を拭ひ、／着物振るへば袂／より／ころりと落つる／水晶の玉を、岳藏手早
 く拾ひ、／『さても不思議。こんな玉さへ貴方もお持ちなさる、か。●●
 近／頃お／求めな／されしか、また／昔より御所／持か』と言ひつ、渡せ
 ば、篠兎は受け／取り／『父上に／別れしより／力落としと／何やかや、苦
 勞をするに／取り紛れ、たも／とに入れた／それなりに』つぎへ

〔十七ウー十八オ〕

つぎ 忘れて／おきし』ト／眩き／つ、／「これ』にはいろ／／謂は
 れもあ／れど』ト／言ひかけて／後は／言はず。／岳藏／顔色／楽しまず、
 『私は貴方／をば憚り／なから兄／弟のやうに力に／思つてゐる。されば
 万端微塵些／か裏表／なく／隠しはせぬ』ト守り袋を／搔き探り、白き玉
 を取り／出だし見すれば篠兎は手に／据えて／見るに、些／か我が持てる玉と
 違へるところなく、これには義と／いふ文字据われり。大方ならず／篠兎

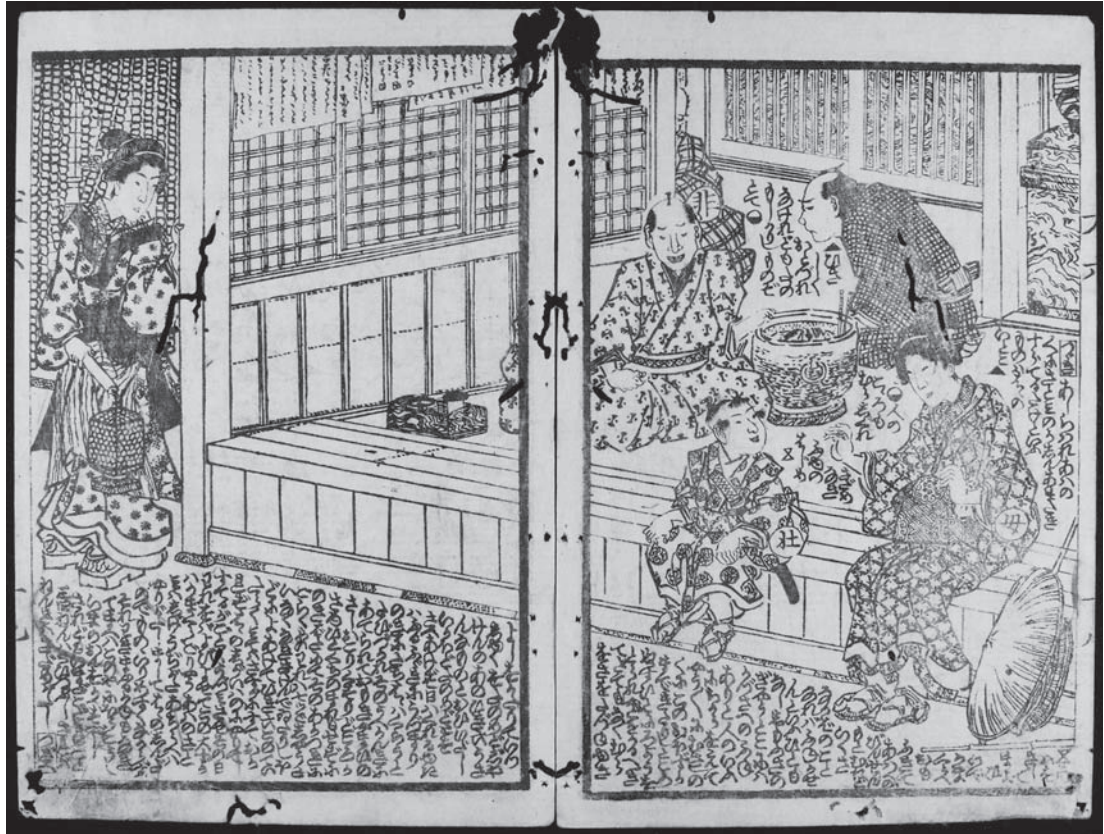


図版9 十七ウ、十八オ

は驚き、『互ひに似たる痣／ありて寸分違はぬ玉を持つ、其方と我は前の世、り深き因縁なくては／適はず。元來畏き生まれにて直人／ならず思ふにも、用心に用心する／心に初めは氣を許さず、物さへ碌に／言はざりしは、目はあるながら人を見分けぬ／愚かしき我が怠り。定めて御身は由緒ある人の子にこそあらんすらめ。素性といひ玉の因縁聞かまはしきが、まつ我が身の上／今は包まず語らん』とて祖父の討死、父の切腹、玉の由来の始め終はり、事細やかに●●●物語れば、岳藏は且つ感じ、且つは嘆きて涙を止めかね、『我等はかりと存／せしが、さて御身も御不仕合はせ、お察し申して不覚の落涙。涙の序てに我が身の上もあら／語るを聞給へ。我が父は伊豆国北条の村長犬河衛次、名を壮之介しし者。我は長祿の三年師走の一日の生まれにて、幼／名を壮之介すけと／呼べり。この玉は生まれし時、召使ひが胞衣を収むる穴を掘るとて土の内より拾ひ出だしし由に聞けり。さて我七ツの年／に及び、●●●御承知も候はん、その頃京より前の將軍よしのり公の御息さまとも君、伊豆へおはし堀越の御所と申し御威勢盛んなりしが、御行ひよくもあらず。奢りに長／下／へ課役を多くかけらるゝを嘆きて御意見申し上げし、父が忠義は不忠となり、重き罪におこなはるゝはさ聞いて／寛正の六年／長月の十一日、父が密かに切腹なし、残るは母と我ばかり。●●●住み慣れし北条を追ひ払はれて此處彼處、縁を求めて彷徨ふほどに、果てしななきことなれば誰も長くは差し置かず。出、行けかしにつぎへ

〔十八ウ―十九オ〕

つゞき あしらははれ、安房の国郷實の家臣甘瀧十郎輝武といふ者は母の從兄弟。●●●久しく訪れなけれど、頼もしかりし者ぞとて●●●人の心も群時雨、定めなき冬の初め●●●あはを指してまよひ出で、鎌倉へおもふきて安房への便船を求むれど、戦半ばのこともなれば船貸せんと言ふ人も無し。下総の行徳には上総への船ありと人の言ふに力を得て、やう／＼に

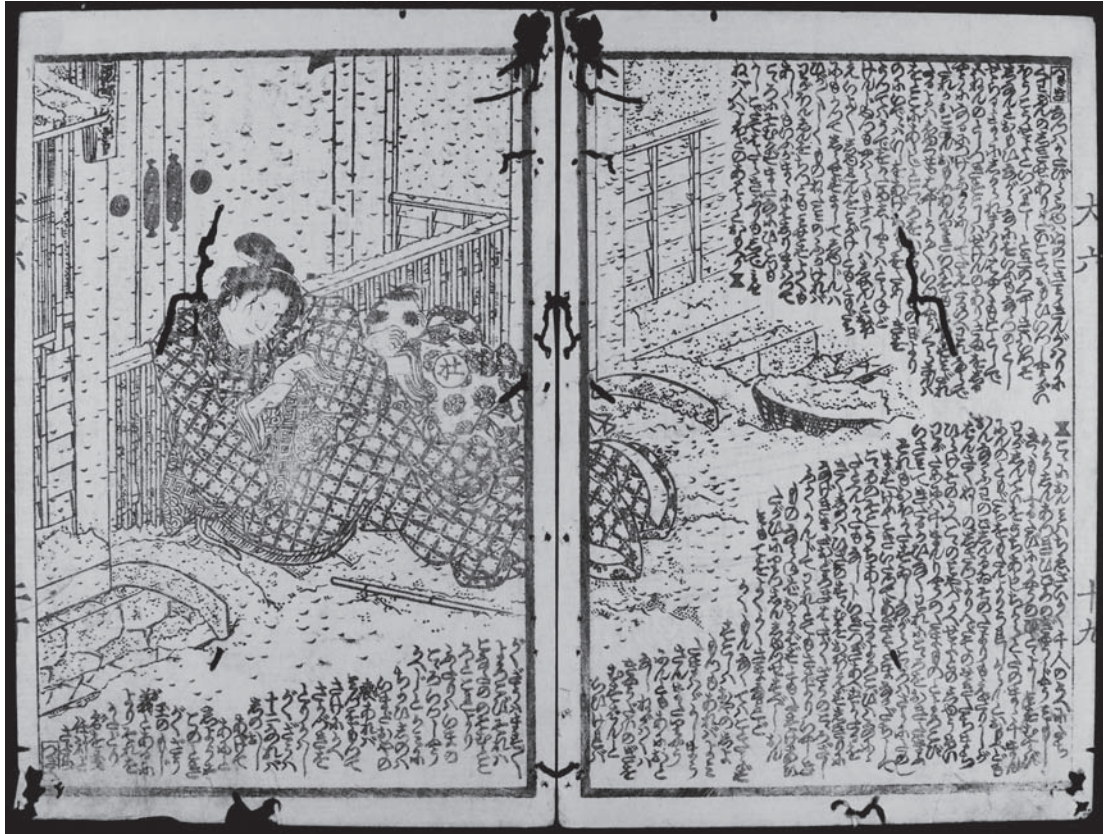


図版 10 十八ウ、十九オ

武蔵の／国この大須賀／まで来りしところ、／盗人に路用を／盗られ宿を借
 るへき／手立てもなく、村／長を訪ね行き」由を語りて一／宿を頼めど、
 邪／見のあの非義六、「胡さ／んな者」と追ひ出だし、／如何ほど頼めど戸
 を／さへ開けず。日は暮れる雪／は降る、吹雪に埋まり／軒に立ち、母は苦
 勞と／旅疲れ、その上寒気に／当てられて重き病の／差し起こり、葉どこ
 ろか／白湯一口飲まれもせず、／軒端にてその 暁に／御落命。我は七ツ
 兎、正た／いなく泣き叫んで居たりしほ／どに、夜明けて非義六この体
 たらく／見ては流石に捨て置か／れず、母の死骸は野にやりて／捨てるが如く
 埋みさせ、その日／我を呼び寄せて、「この大須賀／は鎌倉御領、安房の
 郷／實は成氏方。彼方へは／遣り難し。まして母の死んだ／ので物、入り目
 少なからず。／それ弁ふる金もなき／手前はこの家に奉公し、／今の恩を
 返すべし。／されども未だ子供のこと、／三四年は食ひ潰し、されば／年季
 は定め難し。 つぎへ

〔十九ウー二十オ〕

つぎ夏は帷子、冬は布子、給金代はりに／過分の仕着、有り難いこと、
 思ひ一生涯／奉公せよ」と言はれし時の悔しさは、いつそ／死ななと思ひ
 なから、何を言ふも七つの年、／せらる、ま、に叱られ回り、早くも今年で
 五年の年月。少しは世間の有様を知る／やうになるにつけ、不幸にして絶
 えたる家、我ならで／誰か興さん。思ふ念力岩をも通す。乱れ／たる世は
 出世も早し。うかく／一生暮らさんは／男にあらじと心を起こし、その
 日より／野に出で、は石を挙げ力を試し、木を／打つては腕を固め、師匠
 は取らねど／剣術も柔も少しは自然と覚／え、いよく／手練を研げとも
 友達／にもかつて知らせず。まして主人は／僻く／しく物妬みの深ければ、
 我が本心を些とも見せず、良くも／悪しくも言ふがま、に走り回つて／
 心に背かず。また何一つも／賢立て、働きぶりもしで見せ／ねば人は余
 程の阿呆と思へり。●●此処に御身は知恵才覚千人の上立ち、／孝心篤
 き日頃の行状見もし／聞、もしする度に、斯様の人、誼を結び／我が
 心底を打ち明かし、力と恃ま、千万／人の友達を持たんより嬉しからん
 と思へども、御仲不和の御親類、その便りも得ざりしが、／磐作主の自殺



図版 11 十九ウ、二十オ

より隔ての関忽ち／開け、その上此処の宮仕へせよとの主命。／我が為には
 は千万量の賜物と喜び／勇みて来る甲斐なく、我に心を置き給ふ。／そ
 れも大方推しながら、心は更に樂し／まず。今日時至つて痣と玉媒して、
 心の底打ち明かしたる喜びは何、例へん方もなし」ト息継ぎあへず語
 るを／聞く。篠兎は膝の進むを覚えず、頻りに／嘆きまた驚き、はた岳藏
 の志／深く感じて「我とてもさばかり卑しき／者ならねば、及ばずとも
 助け合ひ／互ひに立身出世すべし。御／身も手を能く書く様なれど、学
 問なくてはこと足らず。／少しは親の書／物もあれば、読み／給はゞ貸し申
 ／さん。また両／人とも兄弟／無し。願はくは／兄弟の義を／結ばん」と
 ／言ひければ、「岳藏はます／喜び、「それは／此方の望むところ」
 と、これより／二人は今の／心一生／変へじと神に／誓ひ、篠兎は／未だ
 親の／喪あれば／水を以て／酒に代へ／杯を／取り交はし、／岳藏は／十
 二なれば／篠兎押し／上げて／兄と／称し、／この時／岳藏／玉の文字
 義とあるに／より、それを／模り／名を義任と／定め、／**つぎへ**

(二十ウ)

つぎ「幼名のを省きて壯助と呼ばん」と言へり。／されどもそれは我
 同士二人の他には人に言ふべきならず。／上辺には元の如く岳藏と呼び、
 篠兎を指しては／若旦那と呼び為して、人に少しも知らすべからず。／また
 その仲の良きことも主家へ知れては／疑はれん。人目には気の合はぬ由に
 ／見せんと、その手立ても細／くと／語り合ひ、「近きに主家へ引き／移り、
 底企みある伯母、／伯母婿と一つに住むに及ん／では、たゞ氣遣はしき宝
 の／御太刀。願ふは御身が／人知れぬ助けにこそ」ト語らへば、岳藏も
 先つ頃茶臼に／凭れ空眠りして／御教書破却と言ひ／立てし企みの始終を
 聞、取りし／ことをも語りて、誓作が未来を／推せし明智を感じ、「斯く兄
 ／弟となる上は誓作主は即ち／我が父。礼拝せん」と位牌に向かひ、
 今日由をも坐すが如く／告げて二人は伏し拝む。折から／外面に足音すれ
 ば岳藏●徐ら次の間へ滑り出で、／隠れけり。／○全て二人が／言葉遣
 ひ子供の様にはあらねども、／奇しき童の／上なれば／並べての／例に
 は／言ひ難し。／目出／度し／／／



図版 12 二十ウ、原裏表表紙見返し

仙果鈔録 貞秀画圖

〔原裏表紙見返し〕

嘉／永／八／乙／卯／春／新／鐫／目／録

〔振り仮名は原文のまま〕

大晦日曙草紙 廿二編／廿二編 京山作／芳綱画

童謡妙々車 初編／二編／三編 種員作／國貞画

八犬傳犬の草紙 卅三編／ヨリ／卅八編／マデ 仙果録／豊國画／國貞画

松浦船水棹婦言 四／五 仙果録／國芳画

御贄美少年始 十一編／十二編 同録／國綱画

八重撫子累物語 三／四 同録／國貞画

俠客傳外摸略説 十二編／十三編 西馬譯／同画

花叢笠梅雅物語 四／五 西馬譯／國輝画

鳴巡浪間朝日奈 七編／八編 種員譯／同画

旅雀我好話 初／二／三 種清綴／國貞画／種員閱

東都南傳馬町一丁目 十二編／十三編 仙果作／國輝画

〔裏表紙〕

南／傳

〔袋〕

六辨梅

亂飄瑞葉

到乃間

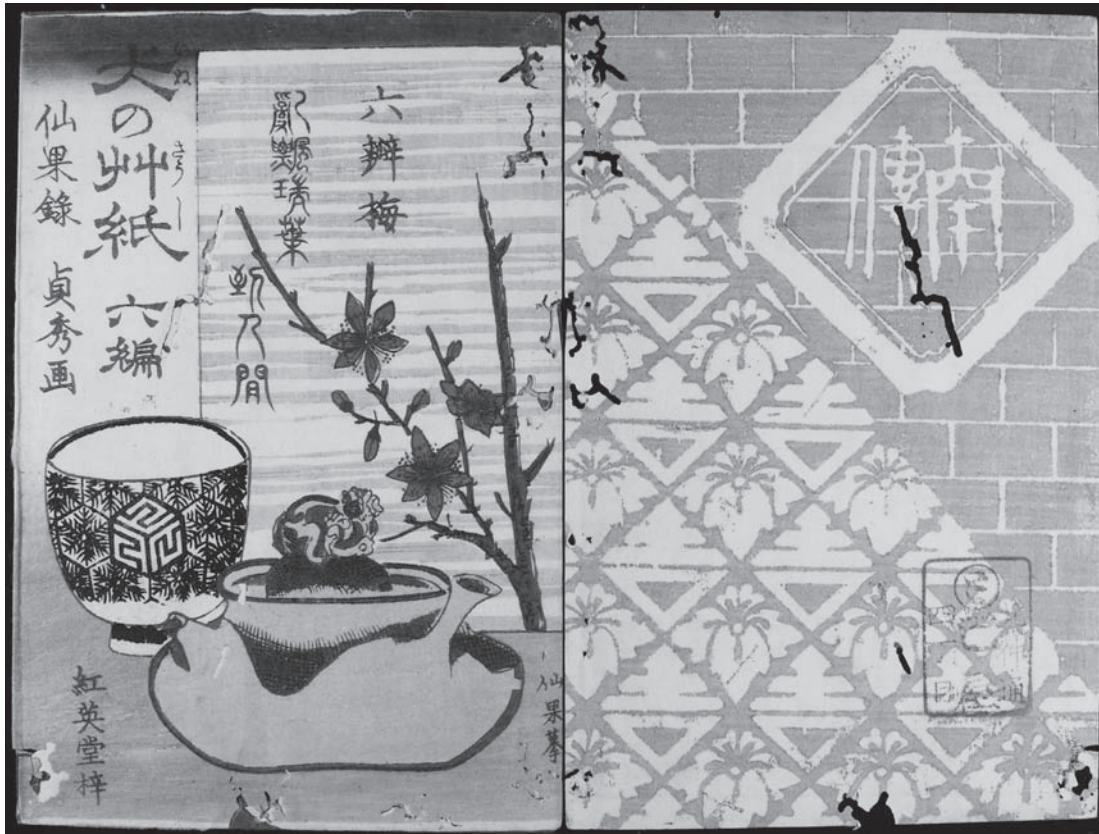
犬の草紙 六編

仙果録 貞秀画

仙果摹

紅英堂梓

〔振り仮名は原文のまま〕



図版 13 原裏表紙、六編袋

登場人物一覧（六編下）

次に『雪梅芳譚犬の草紙』六編下の登場人物名をかけた（読み仮名・漢字とも表記は原文のまま）、その下の【】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物（その他）の名を示す。

犬須賀磐作一戌【大塚番作一戌】

篠兎の父。自らの不自由な身体や篠兎の将来を憂い、亡父大須賀正作参成【大塚匠作三戌】から譲り受けた亡君持氏【足利持氏】の宝刀村雨丸【村雨】を篠兎に託して自害した。

犬須賀篠兎【犬塚信乃】

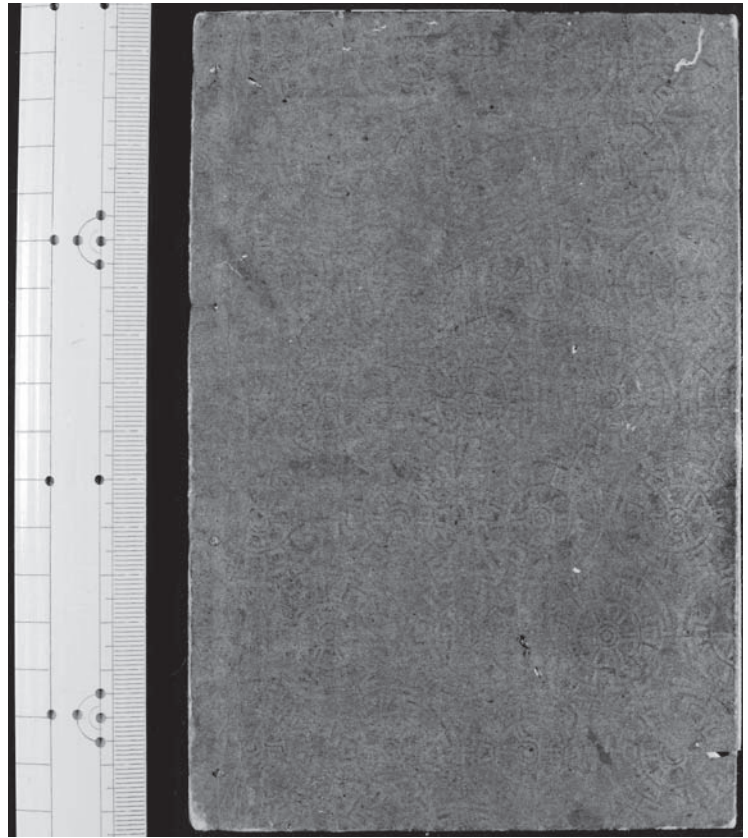
磐作の子。磐作の死後、非義六夫婦に引き取られることとなった。瀕死の飼犬よ四郎【與四郎】を楽にしてやろうと首を落とした後、「孝」の文字が浮き出た玉を得る。更に左腕に牡丹の花に似た痣が浮かび上がった。父の遺言により、犬須賀篠兎成孝【犬塚信乃成孝】と名乗る。

沼田助【糠助】

大須賀村【大塚村】の百姓。

岳藏【額藏】

長祿三年十二月一日伊豆国北条【北條】に生まれる。父は犬河衛次範任、母は郷實治部大夫義真【里見治部大輔義実】の家臣甘瀧十郎照景の従姉妹。幼名は壮之介【壮之助】。父の死により国を追い出され、母と共に甘瀧照景を頼って安房国を目指すも、武蔵国大須賀村で母を亡くし、のち非義六の下僕となり岳藏と呼ばれた。背中に牡丹の花に似た痣があり、「義」という文字の玉を持っている。私かに元服して犬河壮介義任【犬川莊助義任】と名乗る。



図版 14 五編六編改装裏表紙

大河衛次範任【犬川衛二則任】

伊豆国北条の村長。岳藏の父。主君であるまさとももの奢った行いを憂い、これを諫めたが、逆に重罪に問われることを知り、寛正六年九月十一日に自刃。会話にのみ登場。

まさとも【足利右兵衛督政知】

前將軍よしのり【義教】の子。堀越【堀越】公方。会話にのみ登場。

甘瀧十郎照景【蛭崎十郎輝武】

郷實義真の家臣。岳藏の母とは従兄弟にあたる。義真の命で婦志姫【伏姫】の行方を追う途中、富山【富山】の激流を渡り損ねて溺死する。会話にのみ登場。六編下では「てるたけ」となっている。

大須賀非義六【大塚墓六】

大須賀村の村長。旧姓はや、山【彌々山】であるが、瓶ざゝに婿入りして大須賀姓となった。磐作の死後、周りの目を気にして篠兎を養育することにした。

瓶ざゝ、【龜篠】

磐作の異腹の姉で非義六を婿に迎えている。

